

[研究ノート]

## 交差する時間の中で女性らの実践するケア： 五領アートプロジェクトの考察から

小泉 朝未(大阪市立大学都市研究プラザ特別研究員)

### 抄録

本稿はプロセスを重視するアートプロジェクトで交差する複数の時間を記述し、その交差によってプロジェクトに参加する中高年の女性らがケアを実践していることを明らかにする。

アートプロジェクトは現代アートの領域に含まれる実践であるが、先行研究では記録、アーカイブ、プロセスなどのキーワードとともに時間との関係が論じられてきた。アートが時間の集積に新たな価値を与え、読解可能性を広げることは展覧会の実践からも共有されていることがうかがえるが、そこで時間とケア、人との関係を取り結ぶこととの関係は主題化していない。

そこで本稿では、2017年に開始し、2021年現在まで続く、五領アートプロジェクト(大阪府高槻市)について、プロジェクトディレクターへのインタビューや、筆者のプロジェクト記録、地域自治の活動についてのウェブ上の発信情報などを通じてプロジェクトを複数の視点から見て、そこに流れる時間について記述する。記述から確認できるのは、作品作りではなく、地域に残る活動作りを目指すプロジェクトが、地域の歴史、自治によって地域をつくる時間、地域で過ごす時間、記憶、地域の未来といった様々な時間と接続しているということである。

最後にそうした時間の交差が、プロジェクトの核を担う中高年の女性らにとってどのような意味を持つのか、彼女らの社会的立ち位置の変化や生活実践との関連も考えながら論じ、孤立ではなく、互いを配慮し関心を向け合う関係性の中で自らをケアし、かつそのケアを他者へと広げる実践がプロジェクトの時間の中で可能となっていることを明らかにする。

### Key word

アートプロジェクト、時間、交差、女性

### はじめに

4年に渡り継続している「五領アートプロジェクト」(大阪府高槻市)は、五領地区の隣町に住むアートマネージャーがアーティストの力を借りつつ、地域に創造拠点を作ることを目指して始まり、結果的に、仕事や介護での役割を終えた年齢層の高い女性たちや、自治活動を積極的に担う地域住民らとの活動を生み出してきた。本稿ではこのプロジェクトが始まり、現在に至るまでの発展を記述し、地域の歴史、住民らが生活を充実させる時間、地域活動に向ける時間など、プロジェクトがど

のような時間を交差、接続させ地域に根ざした独自のアートの実践となったのかを明らかにする。そしてプロジェクトの参加者のなかでも中心にいる高齢の女性たちが、プロジェクトをきっかけに家から出るようになったり、地域とのパイプとしてプロジェクトにはなくてはならない存在として活躍したりするというように、彼女らが加齢とともに経験する生の変化をプロジェクトの時間がいかに肯定する働きを持つのかを考察する。すなわち、時間を交差させるアートの営みは、彼女らが自らや他者をケアする実践へとつながることを示してみたい。

## 1. 現代アートの実践と時間への意識

まず本章では、はじめに記した問いの背景となる現代アートの実践と時間についての先行研究を確認する。

記録、アーカイブ、プロセスなどのキーワードとともに時間はアートの実践を考察する視点の一つである。記録は出来事を一定の時間として区切るものであると言えるが、ドクメンタ11(2002年)のディレクター、オクウィ・エンヴェゾーは、移民、貧困、ジェンダーの関わる社会問題についてのデモの映像作品などを取り上げ、それらの作品の持つ記録(document)的特徴に焦点を当てた。単なる記録は、アートではないという批判に対して、彼は記録性を持った作品がアートの制度を批判しつつ、ポストモダンの時代性を捉えた表現であることを理論化する<sup>1)</sup>。[石田2014]

美術批評家のハル・フォスター[Foster 2004]はAn Archival Impulseにおいて、現代アートの兆候の一つに「アーカイブ」があることを指摘している。彼は失われたり、取って代わられた歴史的な情報を体現させる作品や、データベース化されずに散らばっている、感情などの非物質的な集積物を解釈していくアートを取り上げ、アーキビストとしてのアーティスト(artist-as-archive)は、資料を探索し改めて作品として提示することで、集積する時間について新たなビジョンを提供する、感情的な連関を新たに生み出すなど、アーティストらがアーカイブを新たに生成すると論じる。日本でも『記述の技術 Art of Description』展(2016年)において、オーラルヒストリー、書籍、楽譜、建造物、場所などの記録資料を提示するだけでなく、映像の編集、テキストやドローイング、残された記録を身体で再現する、パフォーマンスを設定することなどによって、記録資料の読みを多様にすべく制作するアーティストが紹介された。[林田2019]森美術館での『サンシャワー:東南アジアの現代美術展 1980年代から現在まで』展(2017年)では、政府による検閲を逃れながら、パフォーマンスやインスタレーションを公共空間で実験したシンガポールのザ・アーティスト・ビレッジ(TAV)の記録を残し、TAVのメンバーでもあったコウ・グワンハウ自身が構成した「シンガポール・アート・アーカイブ・プロジェクト」(2007年)が紹介された。[喜田2018]記録として区切られた過去の時間は多様な解釈に開かれたものであり、そこにアーティストが介入し、現時点で可能な資料の読み解きをして、新たな意味や価値を提示し、未来で鑑賞する者の解釈を広げることが可能である。そのような前提のもとで展覧会が企画されていることが分かる。

またインターネットの普及やデジタル技術の発展によって、資料をデータとして保管し、アクセスを容易にする「デジタルアーカイブ」でも、未来に視線が向けられている。福祉施設で生み出される障害のあるひとたちの作品は、美術批評や分析の途上であり、データ化し、保管や分類、検索が可能なの

うにデジタルアーカイブする取り組みが近年盛んである。ここでは、アーカイブの作業によって障害のある人の作品を残し、発信すること、障害のある人の制作活動について職員が振り返り、第三者の研究へとつなげる基盤を作るといった、将来的な資料の活用が期待されている。[須之内 2019]

以上に取り上げた先行研究にはケアに関連する視点は主題化していないが、「コミュニティ・アーカイブ」と呼ばれる実践では、一定の関心を共有する人々が生活や自らを含む集団についての出来事を記録し、残す活動が試みられている。東日本大震災について考える「3がつ11にちをわすれないためにセンター」(せんだいメディアテーク)で行われるコミュニティ・アーカイブでは、市民らが映像記録を作り、アーカイブを形成し、施設内やウェブ上で記録を公開している。映像アーカイブは、地域性や時代性などの集合性を担保しながら、個別の記憶や身体性など当事者性の高い記録に触れさせ、多様な声と鑑賞者との結びつきをつくるメディアであることが明らかになっている。[佐藤他 2018:259-305]こうした実践から、コミュニティ・アーカイブを生み出し維持する活動が震災など傷つきの経験と記憶をいかにケアするか考察することは可能だろう。

また、歴史学者保苺実の提案する「日常実践を通じて歴史との関わりを持つ諸行為」[保苺 2018:55]である「歴史実践」<sup>2)</sup>は、ケアとの関連を考えていく糸口になる可能性もある。例えば、戦争体験者でない表現者たちによる戦争表現の実践について聞き書きをまとめた大川史織[2021]は、歴史実践として複数の表現実践を紹介している。そこでは大きな歴史の物語からはこぼれ落ちる〈ひとり〉の物語に注意を向ける方法として、「過去の出来事を〈未来に起こりうる〉こととして想像すること」や日々の暮らしの中で「偶然のなかにつながりを見出す想像力」が時間的な連続性をつくりだし、故人を含めた個としての人と人との関係を取り結ぶ可能性について触れている。[前掲書:6, 8]

本稿のテーマとなるアートプロジェクトは、1990年代以降盛んになったコラボレーションや対話などを重視しながら行われるアートの実践の一つであり、「出来上がる作品以上に制作プロセスが重視」される。[山本 2020:iii]プロジェクトが進行する時間そのものや、そこで行われる共同作業の過程がアートの実践としての重要な特徴を持っていると言え、記録や分析の対象となる。身体や言葉による共同作業で人々がどのような関係性を取り結ぶのかを明らかにすることは、そこに見られるケアについても考えることである。

筆者はアートプロジェクトに関わる人々がプロジェクトに参加し過ごした時間と地域の文脈や人々の立ち位置などが影響しあい、プロジェクトの時間が展開していくプロセスを記述することから、プロジェクトにおける身体の表現やその場で成立するインクルージョンについて論じてきた。[小泉 2019]プロジェクトの基礎になり、プロジェクトに影響するのは「地域の歴史」と一括りにできるものでもなく、関わる人々や場所ごとに展開する様々な時間の流れがあり、偶然もしくは関わる人々の意図や希望によって、それらが交差しながら、様々な人やものが共生するプロジェクトの時間が生み出されていることがわかってきた。コミュニティ・アーカイブや歴史実践とのつながりも意識しつつ、以下の章では五領アートプロジェクトについて複数の時間を丁寧に記述しながら、時間の交差を確認し、プロジェクトの独自の成り立ちとそこで実践されるケアを考えていく。

## 2. 記述: 五領アートプロジェクトを流れる時間

### 2-1. 五領アートプロジェクトの企画の経緯

五領アートプロジェクトは、2017年に地区の隣町に住むアートマネージャー内山幸子さんがディレクターとして企画し、2021年現在まで継続しているプロジェクトである。内山さんは、2005年に神戸で開催された第7回アジア・太平洋地域エイズ国際会議(7th ICAAP)の文化プログラムである、「kavcaap (カブキャップ)」の運営に2003年から関わり、その活動を通してマイノリティのコミュニティでの活動と表現活動との関係について考え始めたという。その後公共文化施設での業務、メキシコで研修制度を利用したリサーチのための滞在、大阪西成区での女性たちとのプロジェクトでアートマネジメントを担うなかで、アートに関わる人々の労働環境、女性の社会的立ち位置、芸術とその受け手との関係について実践を重ねながら考察をしてきた人である。(2020/4/29実施のインタビューにもとづく)

そうした関心のもと、彼女は、女性のために活動をしようというよりも、社会に見られる「ジェンダーや属性間の不均衡をプロジェクトの現場に反映しない」、地域に「アートの形式を持ち込むときもなるべく地域の活動の延長線上で実現する」という「水平を意識」してプロジェクトを進めてきたという。[内山2021:56]

筆者は、研究的な関心とともに、アートマネジメントの多様な実践について知りたく<sup>3)</sup>、アートプロジェクトの様々な展開を見たいと考えていた頃に内山さんに出会い、実施している五領アートプロジェクトについて知ることになった。大阪から京都に電車で向かう際に何度も通過していた五領地区を初めて訪れた2020年は、地区の上を南北に走ることになる高速道路の建設が進行中で、山や淀川の河原に橋脚が立ち始めた頃だった。高槻市駅周辺の繁華街から一駅で木造の家や田んぼや池のある里山的風景が広がる一方で、駅北側には若山と呼ばれる小山と新しい高層マンションがあり、そのふもとは大型車の交通量が多い国道171号線が走る。田んぼと池の周りには日本海から都心部へと電力を運ぶ送電線と大きな鉄塔が見下ろすように立ち並び、学校の近くに変電所もあるという。

以下の節では、内山さんへのオンラインインタビュー(2020/4/29実施)、2020年度に実施されたプロジェクトに訪問した筆者の記録(2020/9/4, 9/26, 10/11, 10/24, 10/29, 11/28)、内山さんとのメールでの複数のやりとり、プロジェクトで生まれた歌や物語を公開する五領アートプロジェクトウェブサイト、地域の連合自治会のウェブサイト、地域自治の活動を発信するウェブサイトを参照して、そこに流れる時間を見ていく。

なお、内山さんへのインタビューや五領アートプロジェクトの見学を始めるにあたり、筆者が研究者としてプロジェクトの外部評価をしてもらって構わないと許可を得た。また本稿をまとめるにあたり、インタビュー内容の掲載や地域で行われる活動についての認識、参加者らの記載方法などについては確認をいただき、了解を得たうえで本稿は完成している。

### 2-2. 五領アートプロジェクトのウェブサイトから見える地域の時間

2021年に立ち上げられた五領アートプロジェクトのウェブサイトでは、プロジェクトの目的や、2017年からの活動風景の写真、プロジェクトで生まれた歌や体操などのYouTube動画を閲覧することができる。

ウェブサイト「ABOUT」のページには、プロジェクトは2017年からアーティストを毎年招き、地域住民と歌や物語といった「20年後、30年後に残る地域の文化活動をつくる」ことを目的にしてきたと書かれている。そしてウェブサイトの開設によって、「それらの歌や物語がいろんな人が演奏や

上演することによって人から人に伝わるように、地域の文化として残る」ことが目指されている。プロジェクトの開催概要がまとめられ、掲載されている楽譜、振付、映像、音楽などは、公益的な活動に利用できるように試験的にクリエイティブコモンズライセンスが付与されている<sup>4)</sup>。このことから、サイトはデジタルアーカイブとしての機能を持っており、プロジェクト自体が20-30年後といった地域の未来を射程に入れて企画実施されていることが分かる。

また、トップページのこれまでのプロジェクトの写真や、歌や体操などのYouTube動画からは、プロジェクトの行われる地域の撮影時の風景やそこに参加する住民たちの様子を視覚的に知ることができる。樹齢を重ねた木々に囲まれた上牧春日神社や、旧安田邸と呼ばれる茶室や庭園を持つ古民家、一乗寺と竹林、淀川河川敷のヨシ原など、ベッドタウンとしての高槻市のイメージを覆す、開発されずに時代を超えて残った自然や寺社などが地域に点在していることが分かる。また同時に、プロジェクト初年度に実施された蚤の市の参加者には、子どもや子育て世代が遊びに来る様子が映り、音楽の演奏には活動的な高齢の女性たちが多く登場し、公民館での劇のパフォーマンスでは、保育園の園児たちが鑑賞していることがうかがえる。地域の歴史を感じさせる風景がある一方で、多世代の住民らが暮らす地域の現在の様子も知ることができる。現在の地域の住民の様子や生活風景を知ることができるため、地域の魅力発信や移住促進のウェブサイトのようにも閲覧することができると言える。

### 2-3. 連合自治会の運営サイトに見る地域の歴史

次に、文化活動が残ることを期待される地域の側から発信される情報を見ていく。

五領地区連合自治会の運営する五領地区コミュニティサイト(以下「コミュニティサイト」と表記)は、地区住民みんなのホームページであり、開設の目的は、五領地区連合自治会やその他の団体のイベント情報の発信、自治活動や防災などについて情報の共有を行い、「五領地区に関連することであれば芸術・文化活動などの紹介を広く行うこと」と記されている。

連合自治会がサイトを運営しているものの、五領地区には自治会に属さない住民が5割近くいることも明記されている。新名神高速道路の建設や国道171号線へのアクセス道路の延伸といった道路関連の工事の情報をホームページに掲載することで、自治会に加入しているかにかかわらず五領地区の住民皆への地域情報を提供することもコミュニティサイトの目的である<sup>5)</sup>。

トップページからタブの「歴史・文化・自然」の中の「芸術文化活動の紹介」へと移動すると、2017-20年までに行った五領アートプロジェクトの説明とウェブサイトが立ち上がったことが内山さんの言葉で紹介され、2-2.で取り上げた五領アートプロジェクトのウェブサイトがリンクされており、地域で行われる芸術活動として認知されていることが分かる。

コミュニティサイトの「歴史」ページには、(1)上牧本澄寺住職三好龍孝お上人による講話(2015)、(2)公益財団法人大阪府文化財センターによる上牧遺跡発掘調査の資料、(3)CATVの高槻市広報番組「情報BOXワイドたかつき」で放送された「高槻見聞録」コーナーのバックナンバーで「五領地区連合自治会」豊かな自然と歴史が宿るまち」の映像リンクが置かれている。

(1)では五領地区にある梶原、鶴殿、上牧、井尻などの村の名前の由来が紹介されている。(2)では、新名神高速道路の建設事業に伴って行われた遺跡発掘調査で、古墳時代初頭～後期前半期に継続した集落の様子がわかってきたことが記されている<sup>6)</sup>。そして、(3)は地区で継承されてきた歴史と文化、地域の特徴が11分程度の映像にまとめられている。内容としては、五領地区は西国街道<sup>7)</sup>と淀川に挟まれ、古くから交通の要衝であったこと、淀川沿いの鶴殿は紀貫之の土佐日記

に登場すること、上牧町から道鶴町にまたがる淀川の河川敷にはヨシ原が広がっており、冬にはヨシ原焼きが行われ、鳥獣保護区としてバードウォッチングの名所であること。上牧のヨシは雅楽で用いられる箆箆のリードの材料で、江戸時代には貢物として献上されていたこと。道鶴町ではヨシで編まれた葦簀が生産されていたこと。映像では、市長とアナウンサーが地域訪問し、特産品の生産に関わっている住民へのインタビューを通じて、これらの地域の歴史が発信される。

ここでは、地域の風土やそこに根ざした産業など、公式的な評価の定まった過去の時間が歴史として共有されていると言える。五領アートプロジェクトのウェブサイトとは異なり、そうした歴史とは切り分けて、住民に向けた道路工事や防災・防犯、育児・教育など、現在地域生活を送る上で必要とされる情報が整理されている。

#### 2-4. プロジェクトが伴走する地域をつくらうとする時間

地域連合自治会のウェブサイトから発信される情報には含まれていないが、内山さんはプロジェクトの開始時期と重なる地域の状況として、2016年に五領地区内に産業廃棄物焼却炉の建設計画が持ち上がった際の、建設の反対を訴えた住民運動を取り上げている。[内山2021:54]

住民運動は、全国から計画への反対署名を集め、議員を通じて市に働きかけて建設を止めさせ、産業廃棄物処理施設の設置には住民の合意を必要とするという内容を含めた市の条例<sup>8)</sup>を作る動きを生み出し、五領地区独自の地域自治の活動へとつながった。住民運動から発展して結成された「高槻・五領の環境と子どもの未来を守る会」(以後「守る会」と表記)は、地区の複数の自治会などから有志の住民が集まり、五領地区の自然環境、農業環境、住環境、文化環境を維持し、その価値を新しく発見したり、次世代に継承したりすることを目標にしている<sup>9)</sup>。守る会は、新しく建設される道路や防災についての情報共有、独自の環境調査などを実施し、「高槻・五領の環境と子どもの未来を守る会News」を発行して、情報を発信してきた。

内山さんとプロジェクト初年度に招聘されたアーティストの一人、深澤孝史<sup>10)</sup>さんはプロジェクトの開始時期と同じ時期に活動を始めた「守る会」の見学に行ったところ、自己紹介やプロジェクトの紹介をする初めての機会を得て、その展開に驚いたという<sup>11)</sup>。その後、彼らは自治活動を進めようとする人たちと交流していき、地域で様々な活動を行う団体や個人<sup>12)</sup>から、地域への思いを聞き、リサーチを進めて行った。

内山さんはこうした「町を維持するために尽力する五領の人たちと伴走することがモチベーションとなり、これまで4年間活動を続けている」といい、地域自治の活動がプロジェクトの立ち上がりとして継続の動機となっていることが読み取れる。[前掲書:55]

初年度深澤さんのプロジェクトの成果である「西国一よしあしー街道・蚤の市」は、上牧・鶴殿のヨシで、葦箆を編み、道に見立てて、地域内外から出店者を募り、梶原の一乗寺で開催された。五領地区には現在東西を走る名神高速道路、国道171号線、東海道本線、阪急電車といった高速で地域を通り過ぎる道があるが、先に記した交通の要衝として歴史的に使われてきた西国街道も同じく東西を走っている。蚤の市はこの街道に沿い、南北に葦箆で道を作り、人々が立ち止まる場所を作り出すために行われた<sup>13)</sup>。

蚤の市のコンセプトを見ると、地域の地理的な成立条件を含む歴史の文脈をなぞりながら、そこに並行する一時的、仮設的なプロジェクトが立ち上げられていることが分かる。そのため、このプロジェクトは、2-3.「五領見聞録」の映像にあるような歴史、地域性に基づくサイトスペシフィックなアートプロジェクトであるようにも見える。

しかし内山さんは論考のなかで、蚤の市の名前について「タイトルに含まれる「よしあし」は、葦(アシ)の名が「悪し」に通ずるといって避けられヨシと呼ばれていることに由来し、地域の中の現在進行形の問題に対する地元住民の賛否両論を言い表している」と注釈を入れている。[同書:61]さらに、蚤の市のタイトルに地域住民が思わず吹き出し笑いをしたと記述がある。[同書:59]このエピソードからは、産業廃棄物焼却炉の建設計画をめぐる「地域の中の現在進行形の問題」対して、住民は賛否両論を言いながら、地域を自分たちのものとしてつくろうとすることに時間をかけており、建設反対運動に加わるのではないにしろ、そうした地域をつくる時間の中にいる住民らの様子に呼応した蚤の市の名前をつけ、その意図が彼らに伝わったことが読み取れる。深澤さんは現在、個人ウェブサイトのバイオグラフィーに「誰かの大切なものを勝手に大切にする方法を考える」<sup>14)</sup>と記載しているが、住民らが地域をつくる時間を大切にしつつ、アーティストとしてそれを転換しながら地域をつくる時間に参加したとも言えるだろう。

蚤の市を経て、五領アートプロジェクトはまちづくりの企画資料のなかで「地域住民の交流イベント」と表記され、アーティストや内山さんの一方的なプロジェクトとして受け取られるのではなく、「住民運動で生まれた交流が下火になっていくのを寂しがる声が聞かれていた」五領地域で、「アートを受け取る側である地域の人たちの欲望と五領アートプロジェクトの接点が見えたことは素直に嬉しかった」と内山さんは記している。[前掲書:55]

「守る会News」は、第8号(2018/3/2発行)で「西国ーよしあしー街道・蚤の市」を記事として取り上げ、以降の年度でもプロジェクトの内容やそこから生まれた歌の歌詞、アーティストの論考などを掲載しており、五領アートプロジェクトが地域自治活動／地域をつくる時間の一環として包摂されている様子が読み取れる。

## 2-5. 地域で過ごす時間の延長で文化活動をつくるプロジェクト

産業廃棄物焼却炉の建設計画反対に向けた住民運動では、地域の自然環境をはじめ地域資源を住民ら自身が再発見することにもつながった[cf. 2017/7/29発行守る会News 第1号記載]。上牧・鶴殿のヨシについても、資源として再認識され、蚤の市でヨシ笛演奏が行われたことをきっかけに、音色に魅せられた地域住民らがヨシ笛サークルを立ち上げた。

2年目のプロジェクトは、彼女ら、彼らと共に活動することから何かを始めようと内山さんは考え、音楽家やぶくみこさん<sup>15)</sup>と「五領の音楽クラブ」(2018)というプロジェクトを行い、即興演奏をしたり、五領地域をテーマにした歌を作るワークショップをして、ヨシ笛サークルが演奏できるアレンジ曲が生まれた。また、2019年はアーティスト藪内美佐子<sup>16)</sup>さんと「宙に浮かぶ長物語-まだまだ途中-」として、ワークショップの参加者がグループになって独自の地域の物語を作り、脚本化した物語を地域にある五領幼稚園、ピッコロ保育園の園児たちの前で上演するプロジェクトを行った。こうして五領アートプロジェクトでは、参加者を募り、リサーチのためのワークショップを数回経て、成果発表をするスタイルができ上がった。このようなスタイルで行うプロジェクトのワークショップ参加者は毎回5-15人で地域の60-80代の女性が9割であるという。(2020/4/29インタビューにもとづく)

地域でヨシ笛を吹くサークルと関わろうとしたという発想のように、2年目以降のプロジェクトでは、地域をつくる時間というよりも、その地域の中で過ごし、楽しみのある時間を共有しようとする住民らの関心に沿い、地域で過ごす時間と接続した文化活動をつくることが模索されている。

2-3年目のプロジェクトの実施と連動するように、「20年後、30年後に残る地域の文化活動を

つくる」という目標は具体的になったと内山さんは言う。ワークショップを経て出来上がるのは、成果発表される一回きりの舞台「作品」ではなく、今後繰り返し「活動」することのできる歌や曲、脚本である点もプロジェクトの重要な特徴である。作品づくりを目指してしまうことで、出来上がる作品は「専門分化の進んだ芸術のシステム」を通じて上演され、提示されるものである可能性があり、「そのまま地域に持ち込むことは検討が必要だ」と内山さんは感じていた<sup>17)</sup>。

そのため、プロジェクトでのアーティストの振る舞いは作品を提供することではない。「ワークショップや成果発表はアーティスト抜きに成立しないが、その過程で生まれる副産物のような歌や物語や技術は、誰もが楽しめる文化活動になる」と彼女は述べる。[内山2021:56]アーティストが担うのは、歌や物語、技術といった「副産物」が生まれるワークショップを構想し、環境を作り、成果発表としてパフォーマンスを見せられるようにすることである。将来的に活動に用いられる副産物としてのアーカイブをつくりだすことにアーティストは寄与しつつも、フォスターが論じるアーキビストとしてのアーティストの態度のように、コレクションや記録資料を探索し、制作のためにそれらを選ぶといった振る舞いをアーティストらは見せていない。むしろ重視されるのは、参加する住民らが地域で過ごす時間の延長上で、これまでやってきたことのない楽しみのある活動の時間をつくりだすことである。それは、地域で現在暮らす人々の楽しみを記録し、未来につなぐ一種のコミュニティ・アーカイブを促す活動ともいえる。

## 2-6. 活動を残す時間と経験や記憶を共有する時間

2020年度のプロジェクトでは、新型コロナウイルス感染症の広がりが収まらず、集まって活動することが難しいことが予想されたが、「集って会っていた時には、会うこと自体が目的ではなかったはずで、人と人が会った時に交わっていたものは何なのかということを考えていきたい」と内山さんは考えていた。(2020/4/29実施のインタビューにもとづく)

まず行われたのは、初年度に生まれた歌と体操「よしあし体操」の撮影と、アーカイブ動画を掲載するウェブページの作成である<sup>18)</sup>。10月11日に初年度からプロジェクトに参加してきた住民らと筆者も一緒に撮影に参加することになり、体操の振り付けをした振付家・ダンサーの伴戸千雅子さんと体操の復習をしてから、梶原の一乗寺、ヨシ原など五領地区を移動して、プロジェクトにとって馴染みのある風景をバックに体操を撮影していった。

内山さんがプロジェクトに女性の参加者が多いというように、実際に8割程度が60代以上と思しき女性たちが参加し、ほかに筆者、2019年度にアートマネジメント人材育成講座の一環で参加した学生、近隣に住み住民らと初めて顔を合わせた文化施設に勤務する人が体操や撮影に参加した。住民らは初めて顔を見る人がいても過剰に気を配ったり、無視したりするのではなく、お菓子、フルーツ、ぬか漬けなど小分けに包んだ食べ物を皆に配り、食べ、筆者の質問にも誰なのかと問うことなく答えてくれる。「暑いね」、「練習の時は振り付けを長く感じるね」といった話とともに、それぞれが明日の予定などを確認しあっている様子を見ることができた。初年度の招聘アーティストの深澤さんは撮影者として参加し、久しぶりに会えたことを喜び、彼女らのおしゃべりの輪の中に迎えられていた。解散も緩やかで、みんなそれぞれ買い物や家など次の目的地に向かって帰って行った。撮影日は活動を残す時間ではあるが、特別なものではなく、これまで通り地域で過ごす生活の時間の延長にプロジェクトの参加者らが集まっていることを感じる雰囲気だった。(2020/10/11記録にもとづく)



アーカイブ動画の撮影と並行して、招聘されたのは、美術家の小山田徹さんである。彼は、アート・美術の可能性について常に考えながら、カフェ、焚き火、子どもの学び場など様々な場づくりをしてきたアーティストである。彼にとっては焚き火をすること自体が目的なのではなく、火に当たるといふ人類が続けてきた行為には人々が様々に関係を結び、何かを共有する場(「共有空間」)を人々が自ら創造していくことができると考え、焚き火を行う場を日本各地で作ってきた。[小山田 2013: 103]

「五領に小さな火床をつくる」(以下「ちび火」と表記)は、感染症の流行状況を見ながら10月24日土曜日の16:30から20:00に1回目を実施された。当日は上牧春日神社の境内に、自治会の回覧板や掲示板のポスターなどで開催を知った住民らが集まった。もともと秋祭りなどが開催され、地域の人たちが集まりやすい場所であった神社で開催したことで、これまで五領アートプロジェクトに参加のなかった住民ら、特に中高年の男性の参加や子連れの若い世代の参加などもあった。彼らは地域で過ごす時間を労働や育児のためにそもそも持てない層ともいえるが、土曜日の夕方から夜の時間という彼らが地域にいる時間に開催されたことで、プロジェクトへの参加が積極的に促された可能が考えられる。

7つのストーブで、小山田さんが巡回しながら火をおこした後は、参加者らがめいめいの思う場所に腰を下ろして火を囲む。火を囲む場の一つに筆者も参加すると、初対面のような緊張はなく、自己紹介もそこそこに、趣味であるとか、普段やっていることなど相手に関心を持ち会話をとつとつと続ける空間が生まれており、筆者がこれまで地域コミュニティでの集まりや中年の男性との会話で経験したことのない時間が流れていた。高齢の参加者らは子どもの頃に火を生活の中で扱っていた世代であり、火のおこし方や火の番などに張り切る様子が見られ、彼らの火にまつわる経験を知る機会になった。(2020/10/24 記録にもとづく)

11月28日土曜日に実施された2回目のちび火は、感染状況がさらに拡大していたため、プロジェクトの常連参加者に限定して声をかけ、昼間の時間に旧安田邸の庭を借り、焚火の練習をすることになった。筆者はそこで、守る会のメンバーや地域の女性たちと再び時間を過ごすことになった。スウェーデントーチや薪を組んで火をおこすことを小山田さんのアドバイスをもらいながら試し、それぞれがおこした火にあたっていると、思いつくままに話が始まり、違う人の話が加わって、いろいろな方向へいく。参加した女性二人が言うには、昔は火を起こすのが子どもの仕事だった。消壺には前日に使った炭が入っていて、それで朝、火をおこすことができる。大阪に嫁ぐ前は大雪の地域に暮らしていて、雪がない場所に憧れて嫁いだ。戦前には、様々なものを食べた。地域の暮らしについての話題に限らず、住民らの経験や火をめぐる記憶を聞き共有する時間となった。(2020/11/28 記録にもとづく)

五領アートプロジェクトでは住民らは火にあたるだけでなく、火の準備から後始末まで扱いに慣れた自然な振る舞いがあり、ちび火の実施後には、「あれは五領の人たちだけでできるね」と小山田さんは話し、住民らの振る舞いによってちび火が地域の活動として継続されていく実感を小山田さん、内山さんともに感じたという<sup>19)</sup>。

4年目のプロジェクトでは、新たな住民の参加があることで、地域で過ごす時間との接続から、再び、それまでにはなかった地域を新しくつくる時間へとプロジェクトの方向が向けられていることが分かる。そして、プロジェクトの中心にいる住民らにとって馴染みのある「火をおこすこと」がテーマとなることで、記憶や経験を共有しつつ、より自分たちの手でプロジェクトを興す方向性も生まれたことが読み取れる。地域で暮らす時間を表層ととらえれば、記憶や経験は語ってもらうことやその人

の所作を見せてもらうことで初めて顕在化するそれぞれの深層で生きられた時間であり、地域に暮らすわけでも、参加者らと日頃プロジェクトをつくっているわけでもない筆者が、そうした時間に接続できたのはプロジェクトの場があったからこそだと言えよう。

### 3. 考察:女性たちにとってのプロジェクトの時間

2章での記述から、プロジェクトは住民らの育む地域をつくる時間、地域で過ごす時間と接続しつつ、土地の歴史、個人の記憶、地域の未来といった時間とも交差していることが明らかになった。最後に本章では、地域でのスムーズなプロジェクト運営の中心を担い、参加の中心でもある高齢の女性たちにとってこうした時間の交差がいかなる意味を持つのかを考察していく。

内山さんは参加する女性らをひとまとめにせず、「妻や母や介護する人といった役目を終えた人、体が丈夫でない人、未婚の人など“いろんな人”がいる」と表現し、彼女らを「ジェンダーとしての女性の役割から一部解放された存在と捉えて」彼女らを「自由にする条件とは何なのかを観察」することもあるという。[内山2021:56]筆者が短いプロジェクトの参加期間で知り合うことのできたプロジェクト参加者のAさんは、仕事をして自活してきた女性だが、弟の介護を機に仕事を辞めて、看取った後に引きこもろうと思っていたところ、内山さんから誘われたのをきっかけにプロジェクトに参加するようになった。彼女は看取り後を守る会にも参加して、地域とのつながりを現在積極的に持っており、病気で緊急手術を受けた際にも身近に家族のいないAさんを地域のつながりのある人々が支えてくれ、乗り切れたと言う。筆者はプロジェクトの見学初日に胸の手術の跡を見せてもらいながらこのような話を聞かせてもらった。家族との離別をきっかけに孤立するところだった彼女は、今ではプロジェクトのワークショップや発表会などの前段階で地域の人々や場所を紹介し、活動許可を得るといった準備と運営を楽しみ、プロジェクトを支える存在である。BさんとCさんは、2-6.で火にあたりながら語っている女性二人だが、Bさんは長年地域で働き、夫を亡くしているが、自宅を地域の女性らと裁縫をしたり衣服を交換したりする場として開き、Cさんは活動家で地域の保育園の園長を務めた後、自治会館で子どもたちのための文庫作りに取り組んでいた。どちらも社会的であり、プロジェクトは長年過ごしてきた地域で、共に暮らす人々と話し、自らが楽しむ場の一つであるようだ。

体操のアーカイブ動画を撮影する日の様子からは、参加する女性たちの関係性を見ることができた。彼女らが撮影の合間に食べ物の交換をしていたと記述したが、お弁当を持ってきていなかった人には、「分けたるから」と言ってみなで引き止め、途中からやってきた参加者が、「振り付けなんも知らんのにどないしょ」と言うと、みんなが大丈夫だと励ましていた。体操の後には「えらい疲れた」と言う参加者が、感染症を避けて家に引きこもっていたから体力が落ちた、肥えたと語り出すと、体操の振り付け指導をしていた伴戸さんは一緒に彼女の自転車を押しながら話を聞いていた。プロジェクトでは、気後れすることや弱音を口にすることができ、かつそれを聞いた他の参加者が応答し、その場に居続けることができるように声をかけていることがうかがえる。

参加する女性たちは、年齢を経て、定年に達したり、家族との離別や死別をしたりすることで、それまでの社会的立場とは違う立ち位置で、地域で暮らすようになった人々である。また、社交性

を持ち、人付き合いが上手く、筆者を含め様々な相手と適度な距離で世話を焼きすぎずに、声をかけて場を共有することに長けている。そうした様子からは、プロジェクトがあったからこそ地域で人々とのつながりができたとまとめるよりも、それぞれの立場で負っていた役割を終えた後に、新たに人とつながろうとする気持ちを実現する場の一つがプロジェクトであったという方が正確だろう。ただし、プロジェクトが地域で過ごす時間とつながっているからこそ、プロジェクトは地域で暮らす彼女たちが過ごすことのできる時間の一つとなっている。そして、共同して活動を生み出すプロジェクトは、互いの状況を聞き合い、配慮や関心のネットワークのなかに自らを置く時間になっている。

さらに、プロジェクトがちび火を通じて、新たな地域をつくる時間へと接続しているとまとめたが、参加する女性たちにとっては、それが彼女らの普段地域で過ごす時間とは異なる時間とつながる機会でもあったと言えるだろう。地域で過ごす時間が違えば、地域で交わることは少なくなる。高齢の女性たちにとって、通常のプロジェクトが行われる日中の時間が参加しやすいことが予測されるが、これまでのプロジェクトで過ごす時間が充実していたからこそ、彼女らは夕方から夜にプロジェクトが行われてもその場を楽しみに家から出てきて参加し、普段接する機会のない他者の時間と交差することができた。火をおこすと聞いて彼女らはさつまいもをアルミ箔で巻いて持ってきて、焚き火に近くの小枝を割り入れ、焼き芋を作って盛り上がり、周囲に配っていた。配慮や関心のネットワークを他者にまで広げていくことは彼女たちには当然のことのようである。

このように、五領アートプロジェクトの時間が地域で過ごす時間、地域をつくる時間と接続していることで、参加する女性らは孤立するのではなく、互いを配慮し関心に向け合う関係の中に自らを置いてケアすることができ、かつそのケアを他者へと広げる実践を行うことができる。

今回プロジェクトの時間の中で言及した、記憶や歴史や未来がケアとどのように接続するのは、筆者がさらにプロジェクトの時間に参加する必要があるだろう。しかし、自らの決意や行動から時間をつくらうとしがちな筆者にとって、彼女らの記憶に触れ、彼女らが様々な生き方を経て地域で異なる人々とつながる時間をつくっていることを知ることは、自らのこれまでの経験を肯定し、他者に関心を向けることを促されるエンパワリングな力を持っていた。こうしたことを手掛かりに、時間と人々の関係の結びかたの多様さを明らかにしていくこと、これが今後の課題である。

## 謝辞

本稿の執筆にあたっては、五領アートプロジェクトのディレクター内山幸子さんに多大なるご協力をいただきました。また、内山さんを始め、アーティスト、地域の方々に記録や研究の視点を持ってプロジェクトに参加することを許していただきました。また査読者の方々には的確にコメントをいただき、思考を論理的に整理することができました。こちらに謝意を記したいと思います。ありがとうございました。

## 註

- 1) エンヴェゾーは、モダニティの終焉の状況の中で自足的なアートの領域の外を目指す傾向や、アートと倫理が対立するものではなく観客と作品が会うプロセスが他者への関心を喚起する場であること、記録が真理を提示するのではなく、言説や出来事の解釈を示すといった特徴を持つことを論じている。[石田2014]
- 2) 歴史学者らによって特権的に研究されてきた歴史をアボリジニの人々の生活空間へ滞在し聞き取りを通じて相対化する中で、保莉は、研究者らが主体になって「歴史を探索する(searching for history)」ことで、史学を構築するのに対して、アボリジニの人々が「日常実践を通じて歴史との関わりを持つ諸行為」[保莉 2018:55]によって、過去や現在について倫理的、政治的、霊的な視点から分析を加える歴史実践を行っていることを明らかにしている。生活の中にある「歴史に注意を向けていく(paying attention to history)」「歴史のメンテナンス」[前掲書:20]と言い換えられる歴史実践は、どのような人間社会でも行われており、「過去のどのような経験や知識が現在にもたらされるかについては、ということはつまりどのような過去の経験や知識が現在にもたらされないかについてもその時代、社会、階級、ジェンダー、信仰、趣味などによってその様式が異なる[傍点本文ママ、同書:56]」と歴史実践を明らかにする意義を述べている。
- 3) 筆者は現在、アーツマネジメント人材育成対象者として一般社団法人HAPSでアーツマネジメントの業務を担っているため実践の方法論についても関心を持っている。
- 4) 以降ウェブサイトのトップページ以外の項目を参照した際は、注にURLを記す。五領アートプロジェクトサイト「このサイトについて」<<https://goryoartproject.com/about/>>参照。
- 5) 「五領地区の道路関連工事について」<<https://www.goryo.net/%E5%9C%B0%E5%9F%9F%E9%81%93%E8%B7%AF%E5%B7%A5%E4%BA%8B/>>参照。
- 6) 上牧遺跡自体が関西電力淀川変電所を建設する際に発見されたものであることも記されている。
- 7) 西国街道は、8世紀の京と各国を結ぶ最短経路であった山陽道を踏襲し、京都から大宰府をつなぎ大阪府三島地域の政治・経済に大きな影響を及ぼした。江戸時代にも参勤交代に利用されるなど重要な役割を果たし、大名行列の一行を受け入れる本陣・旅籠の建築や一里塚などの史跡が残っている。明治時代には国道3号に指定され、現在の国道171号線が整備されるまで、交通路としての重要性は高かった。[南出 2018, 高槻市 2012]
- 8) 2017年6月23日制定、2019年12月14日施行「高槻市廃棄物処理施設の設置に係る手続の特例に関する条例」。
- 9) 2017/7/29発行守る会News 第1号記載、守る会会則参照。
- 10) NPO法人クリエイティブサポートレッツでの企画や、日本各地での芸術祭などでプロジェクトを行うアーティストである。[深澤 2021]
- 11) 2020/09/26筆者と内山さんのメールのやりとりにもとづく。
- 12) 2021/08/14本稿の記載を確認してもらうための筆者と内山さんのMessengerメッセージのやりとりに基づく。ヨシ原保存会、鶴殿ヨシ原研究所、バードウォッチングしている人、河原で土器拾いしている人など、地域住民だけでなく、地域外からやってきて地域で活動する団体や人など様々な人とも話をしたと内山さんは言う。
- 13) 五領アートプロジェクト「西国一よしあし一街道・蚤の市」深澤孝史 in 五領」<[https://goryoartproject.com/project/saikoku\\_yoshiashi\\_kaido/](https://goryoartproject.com/project/saikoku_yoshiashi_kaido/)>参照。
- 14) 深澤孝史ウェブサイト「biography」記載。
- 15) 東南アジア、中東の民族楽器などを用いた舞台音楽の作曲、演奏、即興などを行う音楽家、作曲家[やぶくみこ 2016]。
- 16) 絵画、アニメーション、あみぐるみ、詩などの創作や、パフォーマンス、ハプニングなども行う

アーティスト[藪内]。大阪市西成区で地域の女性たちを中心にした住民と共に手芸や映像、歌などの作るプロジェクトも実施し、内山さんはプログラムディレクターを務めた[Breaker Project 2016]。

17)2021/08/14 本稿の記載を確認してもらうための筆者と内山さんのやりとりにもとづく。

18)よしあし体操は、よしの成長や葦簀の編み方、五領地区の様子などを歌詞や動きのモチーフにしてプロジェクト初年度に作られた体操である。「よしあし体操」振付ビデオでは、深澤さんがアニメーションをつけ、振り付けを担当した伴戸千雅子さんが体操のインストラクションをしている。「よしあし体操 五領のみなさん Ver.」の撮影が行われた際に筆者はその場に立ち会った。

19)2021/08/14 本稿の記載を確認してもらうための筆者と内山さんのやりとりにもとづく。

## 参考文献

Breaker Project, 2016,「地域に根ざした創造活動拠点の実験 2014-2015」『Breaker Project. net』  
<<https://breakerproject.net/project/misako-yabuuchi.php>>(2021/8/19 最終閲覧).

Foster, Hal, 2004, Archival Impulse, *October*, The MIT Press: Cambridge.

深澤孝史, 2021「biography」『深澤孝史 FUKASAWA Takafumi』<<http://fukasawatakafumi.net/bio/>>  
(2021/8/19 最終閲覧).

五領アートプロジェクト, 2021『五領アートプロジェクト』<<https://goryoartproject.com/>>, (2021/8/19 最終閲覧).

五領地区連合自治会, 2019『五領地区コミュニティサイト』<<https://www.goryo.net/#gsc.tab=0>>(2021/8/19 最終閲覧).

林田新, 2019,「記録資料とアーカイブ」林田新・中村裕太・小田原のどか『アートライティング5 記録資料と芸術表現』京都造形芸術大学 東北芸術工科大学出版局 芸術学舎.

保苺実, 2018,『ラディカル・オーラル・ヒストリー: オーストラリア先住民アボリジニの歴史実践』岩波書店.

加治屋健司, 2016,「地域に展開する日本のアートプロジェクト: 歴史的背景とグローバルな文脈」『地域アート 美学/制度/日本』堀之内出版.

喜田小百合, 2018,「シンガポール・アート・アーカイブ・プロジェクトの特殊性に関する考察」『NACT Review 国立新美術館研究紀要』No.5, 国立新美術館.

小泉朝未, 2019,「ともにあることを実現する身体の実現: アートプロジェクトの記述を通じた考察から」『大阪大学大学院文学研究科博士論文』.

小山田徹, 2013,「ちび火考」『文化/批評』臨時増刊号 国際日本学研究会.

倉谷誠, 2020,「第7回講座 共有空間の獲得」『2019年度 京都市 文化芸術による共生社会実現に向けた基盤づくり事業 報告書』一般社団法人HAPS.

南出眞助, 2018,「歩いて(学)ぶ「西国街道の地理と歴史」」『北摂総合研究所報』第2号 北摂総合研究所.

大川史織編, 2021,『なぜ戦争をえがくのか 戦争を知らない表現者たちの歴史実践』みずき書林.

ポロック, グリゼルダ 2021,「美術史におけるフェミニスト的介入という思考実践はなぜ必要なのか」『美術手帖』vol.73, No.1089 美術出版社.

佐藤知久, 甲斐賢治, 北野央, 2018,『コミュニティ・アーカイブをつくろう!—せんだいメディアテーク「3がつ11にちをわすれないためにセンター」奮闘記』晶文社.

須之内元洋監修, 2019『どうしようからはじめるアーカイブ』みずのき美術館+鞆の津ミュージアム+はじまりの美術館.

高槻・五領の環境と子どもの未来を守る会, 2017, 2018,『高槻・五領の環境と子どもの未来を守る会 News』第1号, 第8号.

高槻市, 2012「西国街道と芥川一里塚」『インターネット歴史館』  
<[http://www.city.takatsuki.osaka.jp/rekishi\\_kanko/rekishi/rekishikan/jidai/edo/1327659007608.html](http://www.city.takatsuki.osaka.jp/rekishi_kanko/rekishi/rekishikan/jidai/edo/1327659007608.html)>  
(2021/8/19最終閲覧).

内山幸子, 2021,「水平を共に目指して:メキシコと五領を往来して考えたこと」山田創平編著『未来の  
アートと倫理のために』, 左右社.

藪内美佐子『misako yabuuchi//藪内美佐子』<<https://misako-yabuuchi.wixsite.com/misako-yabuuchi>>  
(2021/8/19最終閲覧).

やぶくみこ, 2016,「biography」『やぶくみこ COMPOSER / IMPROVISER』  
<<https://www.kumikoyabu.com/bio>>(2021/8/19最終閲覧).

山本浩貴, 2019,『現代美術史:欧米、日本、トランスナショナル』中央公論新社.